

## 太平洋炭礦図書館と機関紙「読書タイムス」

川島 直樹\*

戦後の釧路文化の発祥は太平洋炭礦からだ。そう呼ばれた時期がありました。然り。文芸、美術、音楽、演劇、エトセトラ。同炭礦社史の、敗戦後およそ十年間の項を探ると、いくつもの文化サークルの誕生がみてとれて、壮観です。社内報「太平洋」、労組機関紙「地叫」「響土」、主婦会の生活記録誌「母のうぶごえ」、文芸誌「響土」。出版物の顔ぶれもまた多彩でした。近年、釧路市立博物館の石炭関連の特別展で目にしてご存知の方もおられるかもしれません。

「読書タイムス」の名を聞いてそれが何をさすものか気がつくのは、ごく僅かの人でしょう。1948(昭和23)年から翌年にかけて、太平洋炭礦図書館が発行した同館の機関紙のことです。太平洋炭礦資料室が収集・整理する膨大な資料群からも洩れていたといいますから、希少であるのも無理はありません。そもそもこうした紙ものは散逸しやすく、後世に残りにくいのです。かくいう私も、古本屋で働いていながらこの小文にとりかかるまで無知でした。

きっかけは、インターネットによる国立国会図書館の蔵書検索です。釧路市立博物館学芸員の石川孝織さんがたまたまマイクロ資料の所在を探りあてたのです。「読書タイムス」の発行時、日本は敗戦後の占領下にありました。そのバックナンバーは、連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)が検閲のためにおこなった被占領国刊行物の一大コレクション「プランゲ文庫」にしっかりと収まっていた。

コピーを取り寄せることができた「読書タイムス」は、第1号から第4号までの4号分。タブロイド判による刊行で、第3号までが各2ページ、第4号のみ4ページあります。どの号にも検閲の印が押されています。最初の号の発行日は、昭和23年10月18日です。以後、ほぼ1ヶ月おきに出ていますが、第5号以下の確認はとれていません。翌年

\*豊文堂書店(釧路市)



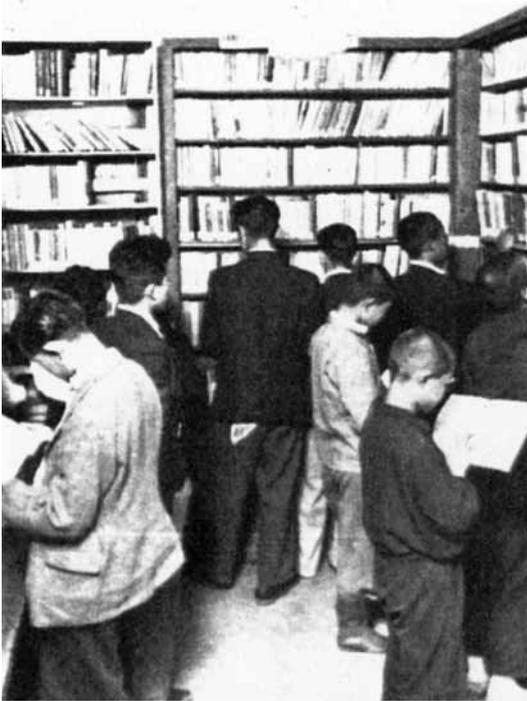
青年会館(2階に太平洋図書館) 1957(昭和32)年ころ  
釧路市紀要太平洋炭礦資料室所蔵

1月1日発行の第4号が最終号のようです。というのも、1949(昭和24)年2月をもって、同紙の休刊を届け出るGHQの民事検閲局宛ての書類が見つまっているからです。

「ヤマ」の人達に一冊でも多く本を読んでいたかどうかとする図書館と、本を読みたいと思われる「ヤマ」の人々との橋渡しの役目を果たするための一方法として発刊致したものと、第1号所収の「発刊挨拶」より。息長い継続をのぞんでいた同紙ですが、4号で止まりました。その理由は60年以上たつ今、探る手だてがありません。紙面の具体に分け入った資料も見つからず、雲をつかむよう。「読書タイムス」の名は太平洋炭礦図書館の紹介に付随して、ごく僅かに顔をのぞかせるばかりの儂さです。となれば個々の記事を取りあげるのは後回しにして、発行元のあらましを素描することからはじめましょう。さいわい手元には、次の2点の資料があります。

- 「太平洋炭礦図書館創立五周年 第三回北海道文化奨励賞受賞 記念 図書館要覧」 私立太平洋炭礦図書館 1951(昭和26)年
- 「概観・北海道の炭鉱図書館」 坂本龍三 北海道武蔵女子短期大学紀要 第7号別刷 1974(昭和49)年

「終戦後炭礦従業員並にその子弟の文化水準昂



太平洋図書館「図書館要覧」1951（昭和26）年

揚の希求と相まって図書館の必要性を痛感し、当時労働組合文化部に於て各家庭より寄贈されていた書籍及び雑誌を主体に貸出文庫として運営して居たのを拡充し会社経営により新に運営するよう労組文化部と会社労務課関係者並に青年層の有志が協力し図書館設立運動を起し、昭和二十一年十一月三日の新憲法発布を記念して健保組合階上会議室（二十坪）を借用し館名を太平洋炭礦図書館として発足した。」（「太平洋炭礦図書館創立五周年 第三回北海道文化奨励賞受賞 記念 図書館要覧」 所収「沿革の概要」より）

「概観・北海道の炭礦図書館」の坂本龍三さんの指摘によると、炭鉱図書館としては全国でもおそらく最初のものだということです。運営には社の福利厚生を受けもつ労務課があたりました。関係者の誇らしさはいかばかりだったことか。新憲法発布の日にあわせた開館に強い意気込みがあらわれています。

日本の国全体が新たな思潮を欲して沸き立っていました。文化サークルが相次いで創設され、図書館が開設された太平洋炭礦の若者たちの動きも、

時代の要請に呼応するものです。戦後復興の好景気も見逃せません。増産につぐ増産でヤマは潤います。出炭トン当たり10円の文化費を支給するめぐまれた条件は、文化活動の発展にとって強力な後押しとなりました。うち半分の5円が図書館運営費に充てられたといい、会社側の理解ある援助は特筆ものです（後にこの制度は、出炭量の増加により年間契約に切り替わります）。

健康保険組合2階会議室を借りてはじまった図書館業務ですが、当初は本集めにも労苦がともないました。

「空襲のツメ跡が深くてまだ釧路市内の書店には充分に本が並んでおらず、図書館の資料整備には余程苦労したらしく、当時の労務係担当の菊地源次郎が中心になって、浜口竜司とか皆島環とか佐熊旻などがリュックサックを背負って札幌まで出て本を集めたという話が、伝説的に伝わっている」（『釧路文学運動史（戦後編）』 鳥居省三 釧路市 1978（昭和53）年）

上記文中の皆島環さんのお名前は、「読書タイムス」にも執筆者として出てきます。今回、太平洋炭礦管理職倶楽部の佐藤富喜雄さんの力添えで話をうかがうことができました。1923（大正12）年生まれの皆島さんが太平洋炭礦に入社したのは敗戦の翌年。配属先は機電課でした。本好きを見こまれて初代館長の菊地源次郎さんに声をかけられたのは、1947（昭和22）年ごろのこと。仕事帰りに数時間、図書の貸し出し業務を手伝うこととなります。前出の「伝説」についてお尋ねしますと、会社の出張扱いで札幌へ本の買いだしに出かけたことを裏付けてくださいました。

「鳥居さんってのは、そのころからやっぱり勉強家っていうのか、すごかったですね。本の分類も早速取り入れた」

皆島さんがそう振りかえります。ここでいう分類とは、図書館ではおなじみの日本十進分類法のことです。館の運営に関わった方は大勢おられますが、この人ということであれば鳥居省三さんに

集約されるようです。国鉄在職中から各方面で文学活動をされていた鳥居さんが、太平洋炭礦図書館に招聘されたのは1948（昭和23）年のこと。釧路の戦後文学を担うことになる名伯楽は、まだ23歳の若さでした。

1949（昭和24）年9月、待望の新設なった青年会館の建物2階に太平洋炭礦図書館はうつります。文部省より図書館設置の認可があり、また図書館法の適用も受けて、名実ともに図書館と同種の施設として運営されることになったのも、その前後です。器と人と。舞台は整いました。

「読書タイムス」の編集責任者は、4号つうじて労務課長の出雲貞明さんになっていますが、実際に携わったのは鳥居さんでした。太平洋炭礦では、他にも「望洋」、「太平洋新聞」の都合3誌を編集していたと、『釧路文学運動史（戦後編）』にご自身が書いておられます。1951（昭和26）年3月、新館舎に切り替わったばかりの市立釧路図書館に転出するまで、三代目館長としてさまざまな図書館教育の実践を行いました。機関紙「行人」で知られる春採ペンクラブの発足も、図書館の読書会が発展してのものです。ここで培った経験が、次の職場で大いに花ひらいたことは間違いありません。それは釧路の文学界、ひいては文化運動全般にとりたいへん幸せなことでした。

太平洋炭礦図書館の道のりは、ひとまず「読書タイムス」とのかかわりまでで区切りをつけることにします。館自体は、その後も場所を転々としながら長くつづきました。利便性がよく人が集まりやすいところへと、ただし移るたびに規模を縮小しながら。

次の皆鳥さんの言葉が印象に残ります。

「やっぱり菊地さんが鳥居さんを見つけてきたっていうのか、太平洋炭礦の図書館運動の一番よかった点ではなかった

かと思いますね。あれがやっぱり、ただ菊地さんとか我々とか素人ばかり集まったんじゃないか、一時的にはできたかもしれませんが、継続性はなかったんじゃないかと思います」

「読書タイムス」の紙面は、第1号から過不足なく仕上がっています。

貸出図書傾向をさぐり、読書クラブの結成を謳い、坑員の読書アンケートをまとめ、長めの書評や新着本の情報、さらにはコント調の短文まで載せています。貸出書がベストセラー小説に偏りがちなことを鑑みてか、名著紹介のもと『源氏物語』などよく知られた古典に紙面を割く余裕もあります。第2号からは、炭礦従業員がものした数編の短詩も載りはじめました。



図書タイムス 第一号 1947（昭和22）年10月18日発行 国立国会図書館 蔵

登場する書名は多岐にわたります。それらを眺めるだけで、同時代の文化状況の一断面が立ち上がってきます。古本屋が見入ってしまうのは、第4号所収の「私のベストテン 探偵小説論」と題した皆島さんの長文です。書いたご本人も覚えておいででした。わけてもベストテンの6位にあげておられる小栗虫太郎の『黒死館殺人事件』の刊行本が気になります。戦前の初刊本であれば相当な古書価がつくところですが、図書館の開設年を考慮すると、ここは1947・48（昭和22・23）年初版の正統2冊からなる高志書房版ではありますまいか。無益な妄想にひたってしまうことしきりです。江戸川乱歩の『陰獣』評には、「図書館には乱歩氏のものゝ沢山あるが、白髪鬼、人間豹、蜘蛛男、幽鬼の塔等」とあり、こちらもそそります。

長文の評論、アンケートや詩など署名記事と、無記名の囲み記事の割合は半々です。後者の大半は、編集長が一手に引き受けていたのでしょうか。唯一、第4号掲載の小説めかした「小品 “聖母の呪い”」のみ、鳥居省三の署名を刻んでいます。試しに、ご本人作成の原稿を基にした「鳥居省三書誌」（木村修一・編 釧路短期大学 1998年）を開いてみます。作品年譜の昭和23年の項に初出紙「読書タイムス」は見当たりません。鳥居さんの手元にもなかったかもしれず、「小品 “聖母の呪い”」は幻の作品と見なせそうです。

「呪い」は幻の作品と見なせそうです。

太平洋炭礦図書館が分館をもっていたと教える記事がありました。

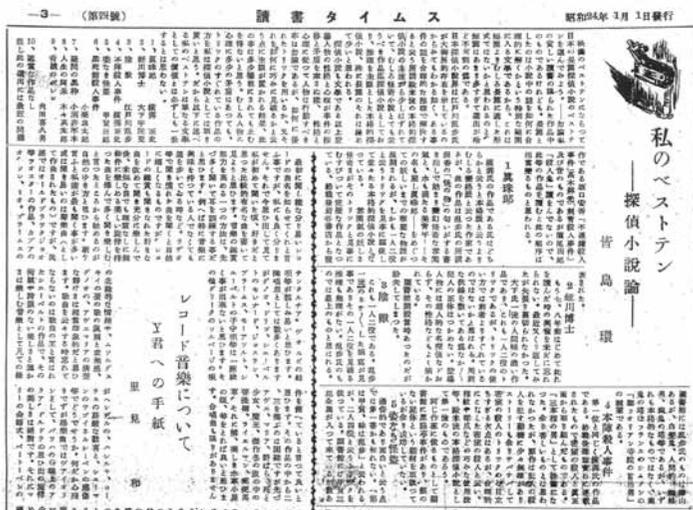
「図書館では技術関係の専門書を現場の多い場所に置く方が本の利用度の高い事を予想し、九月に技術関係の専門書を技能礦員養成所に移譲、分館を創った」（第2号）。

技能礦員養成所は、炭鉱に必要な国家資格を取得するための社内教育機関です。棚がいくつかあるくらいの小規模な分館だったかもしれませんが、必要とする人にとり大いに役立ったことでしょう。また同炭礦では、太平洋炭礦高等鉱業高校を運営していた時期があり、そこでも小さな図書室を設けていたといひます。人が集まるところ、図書館は生まれる。そんな根拠のない断言をしたくなるほどの増殖ぶりです。

本稿の締め切り間際、文学好きの常連男性と話していて、偶然その方が中高校生のころ太平洋炭礦図書館に通っていたことを知りました。ご尊父が炭鉱で働いていたそうです。そのとき借りて読んでいた雑誌、常勤の司書の方の肖像、友だち同士誘い合ったり好きな女の子と待ち合わせたり、学生にとって居心地のよい場所だったこと。半世紀以上前のことを生き生きと語っていただきました。

電子書籍の導入をめぐってますますかまびすしい現在です。紙の本の権勢はいずれ衰えるでしょうが、ならば尚のこと、太平洋炭礦図書館をめぐる挿話は目にまぶしく映ります。執筆中、頭上を旋回していたのは、本と人とを結ぶ場所の魅力についてでした。それは店舗販売を旨とする古本屋にとって、いつでも立ち戻らなければならない原点であるはずだからです。

付記：引用文は、新漢字新かなづかいで統一し、送り仮名は原文どおりにしました。



読書タイムス 第4号 1949（昭和24）年1月1日発行  
国立国会図書館 蔵